

優秀賞の「ロボットと珈琲の話」は、75歳の老人と、老人の娘夫婦がプレゼントしてくれた手伝いロボット「A2」とのふれあいの物語です。時代設定は2072年ですが、背景の描写が、あまり近未来らしくないのが少々気になりました。しかし、まだまだ行動力盛んな「アクティブじいさん」と、ユーモラスなロボット「A2」は、どちらも妙に現実感があり、二人のキャラクターがチャーミングなのが、なによりいいと思いました。

後半の老人とロボットとの会話が、この作品の読ませどころです。

「人間が生きる意味とは、なんだと思う？」老人が発した問いに答える「A2」の、「宝物ヲ集メルタメ」以降の言葉は、ずっと自然に、読み手の心に入ってきます。

ラストはストレートすぎるので、ここをもう少しひねると、作品としてはもっとおもしろくなると思いました。とはいえ、この素直さが、読後感をよくしているといった面もありますね。あふれる優しさが、読者をふわりと包み込む、とてもあたたかな作品でした。

奨励賞の「海に見える街で」は、転校した海辺の中学校でも吹奏楽部に入部した、フルートを吹く女の子が主人公です。全国大会の常連だった前の学校とは違い、演奏技術は低いし、コンクールにも出場しない部にとまどう主人公の心情が、前半、実によく描けています。

作品の後半は、養護学校での演奏会を経験し、障がいをもつ子どもたちとふれあうことで、主人公が変わっていく様子が描かれています。その展開はいいと思うのですが、主人公の心の変化が急激すぎるところに、不自然さを感じました。また、新しい学校の吹奏楽部のあり方を肯定することで、前の学校の部を否定的にとらえてしまう、といったあたりも極端で、かなりの無理があります。

終盤では、主人公が養護学校で知り合った生徒が急死してしまいましたが、これも急ぎすぎです。このようなストーリーでまとめるためには、いまの四、五倍ぐらいの原稿枚数が必要です。話のテーマ、内容に合った、作品の長さというものがあるからです。

風景や楽器の描写がうまく、文章力のある作者ですので、後半をたっぷり分量をとって、ていねいにじっくり描き込むと、いまより数段、説得力のある作品になるでしょう。

今回、突出した作品はありませんでしたが、全体的なレベルは高かったと思います。どの作品も大きな破綻がなく、まとまりがよいことに感心しました。ただ、少しおとなしい印象のものが多かったので、破天荒でインパクトが強い作品にも出会ってみたいと思いました。みなさんの今後の作品に、さらなる期待をしています。